



## 「あえて不便にする」ということ

涼しい風が心地よい秋になりました。中高生は文化祭や体育祭などの学校行事が目白押し。思い出深い季節となることでしょう。

ある時、「〇〇ってどういう意味ですか?」「□□ってどうやればいいですか?」「この問題が分かりません。」と聞かれた場合、どのように答えますか。おそらく、その意味ややり方・解き方について、一から懇切丁寧に“教えてあげる”というのが、一般的な対応のしかたでしょう。しかし、(程度によりますが、)聞かれたことに対して何でも“教えてあげる”という対応は、本人の「学ぶ力」を弱めてしまい、かえって逆効果になってしまうことがよくあります。

たとえば、子どもの宿題を1から10まで親が懇切丁寧に見てあげる、というケースがあったとします。確かに勉強に苦手意識をもつ子にとっては、毎回出される宿題が大きな壁となっていることでしょう。しかし、そこで親と一緒に解いたり答えを教えてあげたりすると、その問題ができるようになるのはあくまで「親」であり、子ども本人ができるようになることはほとんどありません。しかもその状況に慣れてくると、やがて子どもが親に答えを求めようになります。子どもにとってはその方が楽だからです。親はそれがいけないことだとわかっているにもかかわらず、つきっきりでやらないと子どもは勉強しないので、仕方なく付き添うようになり・・・という良くない循環を生んでしまいます。やがて小学校高学年から中学校になると、各教科が専門的になり分量も格段に増えるため、親が見てあげられる状態に限界が生じます。それにより、「まったく勉強しない中高生」が完成します。

先述の問いに対してLABO7では、例えば「じゃあ、どうして〇〇ってこういう漢字を書くんだと思う?」「□□をやるために必要なことは何だろう?」「この問題の特にどういう点が分からないのかな?」などと、さらに深掘りした問いかけをすることで、自分の力で考えながら正解にたどりつかせるように導きます。必要に応じて、「辞書やタブレットを貸すから調べてごらん」と言って、ひと手間加えることもあります。そうすることで、わかったときの印象や感動が強まるのです。つまり、「あえて不便な状況を作る」ことで、「自分の頭で考えて学ぶ」ようになるのです。やがてこの状況に慣れてくると、自分で理解してわかりそうなものについては、自分で探究し答えにたどり着こうとするようになります。

LABO7は常々「思考力・判断力・表現力」や「主体性」を大切にする教育として、「自分の力で考えて状況を打破する経験」づくりに努めています。それは、一つのテーマや課題について挑むアウトプットゼミだけではなく、勉強などでわからない部分の質問対応という日常的な会話のやりとりも例外ではありません。この積み重ねがきっと未来につながると信じて、「あえて不便な状況」を作りつつも、自分の頭でものごとを考え、自分の力で知識を増やし、その知識を自分の考えで生かせるようにと願いながら、日々接しています。